

SHIBUYA

しぶやフォーラム2020

“プチ”

FORUM

男女平等と多様性社会の
推進をめざして

“PETIT”

2020

日時: 2021年2月27日(土) 13:30-17:00

主催: 渋谷区

運営: 特定非営利活動法人シブヤ大学

協力: 渋谷男女平等・ダイバーシティセンター運営委員会

CONTENTS

3 「しづやフォーラムについて」

7 「オープニングの時間」

GUEST SPEAKER

鈴木 茂義

11 トークイベント第1部

「オンラインで、 学びと交流の場を つくる方法を知る」

GUEST SPEAKER

岩元 暁子、廣瀬 聡

18 トークイベント第2部

「#わたしもたねをまく —コロナと孤独と 新しいつながり方を考える—」

GUEST SPEAKER

北村 文、高橋 ケンジ、堀 潤

26 アンケート結果

「フォーラムについてのアンケート結果」

「オンライン開催についてのアンケート結果」



「しぶやフォーラム について」

しぶやフォーラム 沿革

1983年に女性の地位向上をめざし、区主催で開催された「婦人のつどい」から始まり、その後「女性のつどい」と名称を替え続けてきました。

1992年に女性団体を中心とした区民の活動拠点として、渋谷女性センター・アイリスが開設されてからは、「アイリスのつどい」と「女性のつどい」を開催。2000年からは両つどいを統合し、「しぶやフォーラム」として、区民の自主的な活動を元に、実行委員会形式で渋谷区と共催してきました。



概要

しぶやフォーラム 概要

「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が2015年4月に施行され、「女性センター」から「男女平等・ダイバーシティセンター」になりました。

女性だけでなく、ジェンダーやセクシュアリティの問題、その他、社会的にマイノリティとされ生きづらさを感じている人の問題にも目を向け、男女平等と多様性社会の実現をめざすフォーラムとして開催しています。

実行委員会で企画から運営まで、一つのイベントを作り上げる中で、参加者のエンパワーメントを図ります。



概要

しぶやフォーラム 2020 “プチ”

オンライン開催について

2020年度は、世界的な新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、東京オリンピックなどイベントの中止や、様々な社会活動の停止を余儀なくされました。

渋谷男女平等・ダイバーシティセンターにおいても、センターの利用や集客に制限をかけざるを得ない状況下で、啓発事業や相談事業をオンラインに切り替えて開催してきました。

これまで、実行委員会形式で開催されてきた「しぶやフォーラム 2020」においても、緊急事態宣言が発出される中、実行委員会形式ではなく、完全オンラインで“プチ”として開催することになりました。



概要

次年度以降、また多くのシブヤ民に企画から参加していただくため、当たり前になりつつあるオンラインの活用について学びながら、今だからこそできる「多様性社会の実現」への行動を考えました。



オープニング

「しぶやフォーラムって なんだ？」

GUEST SPEAKER

鈴木 茂義

しぶやフォーラム 2020“プチ”の最初のプログラム「オープニング」の時間では、2017年度、2018年度の実行委員長を務めた鈴木茂義さんがしぶやフォーラムの魅力について語りました。

鈴木さんは「虫めがねの会」という市民活動を行っています。LGBTや教育などのテーマを語り合い、人とつながる活動です。「虫めがねの会」がアイリスに登録団体として関わっていたことから、実行委員長として参加することになりました。

鈴木さんの考える、フォーラムの魅力は「大人



オープニング

の文化祭」。背景の異なる人々が集まり、ゼロから一を作り上げる場です。職場の人間関係でもない、家族や友人でもない、多様な人が集い、楽しみながら作り上げるサードプレイスとしての価値を見出していました。

「自分が経験していないことを経験している人たちと、語り合うだけでも楽しかったんです」普段の生活では出会わないかもしれない、様々な問題意識を持っている人たちとの関係を作り上げながら、フォーラムの構成を作っていくことの楽しみを語ってくれました。

次に、鈴木さんから、今までのフォーラムでの取り組みについてうかがいました。2017年のしぶやフォーラムでは、「みんなの学校」という映画の上映・トークショー、対話の活動「ヒューマンライブラリー」などの企画を立ち上げ運営を行いました。



オープニング

また、2018年のしづやフォーラムでは、異なる分野の実践者の方から「社会を良くしていくためにはどんな取り組みが必要か？」というテーマでトークイベントを行いました。また、ゲストの方の言葉を呼び水に、参加者の方たちで議論するグループトークも行いました。「未来会議」というタイトルで、色々なテーマのもとに集い語り合う時間です。

鈴木さんが二期続けて実行委員長として活動したキッカケは、参加者の方たちから受け取った感想の声です。意見を受け取り、もう1年続けることでもっと面白くなるのではという期待感から次年度への挑戦の気持ちが沸き上がりました。

誰でも参加でき、誰でも運営することのできる場が「しづやフォーラム」です。

キャリアも経験も年齢も様々な人たちが関わり合



オープニング

うフォーラムへ、この記録集を読んでもらっているあなたのご参加もお待ちしています。

SPEAKER'S PROFILE



鈴木 茂義

公立小学校非常勤講師。自治体の相談員。上智大学文学部非常勤講師。専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。1978年茨城県生まれ。文教大学教育学部卒業。14年間の正規小学校教諭として勤務を経て現職。教員19年目。学校に勤務しながらLGBTと教育や多様性に関する講演活動を行なっている。



第1部講座

トークイベント【第1部】

「オンラインで、
学びと交流の場を
つくる方法を知る」

GUEST SPEAKER

岩元 暁子 (日本ファンドレイジング協会)

廣瀬 聡 (バリューブックス)



第1部講座

「オンラインで、学びと交流の場をつくる方法を知る」

第1部では、日本ファンドレイジング協会の岩元暁子さん、ブックファンドレイザーの廣瀬聡さんをゲストに迎え、オンラインでの学びと交流の場を作る方法についての講演を行いました。

2020年にオンラインでの実施に挑戦した、ファンドレイジング・カンファレンス「ファンドレイジング・日本 (FRJ)」(<https://jfra.jp/frj>)の事例を紹介いただきつつ、参加感を高めるオンラインツールの活用方法やボランティアスタッフとのチームビルディングなどについてお話しを伺いました。

FRJ2020では様々なコンテンツを企画し、イベントが開かれていました。

イベントのプラットフォームとして活用したのはEventHub (イベントハブ) です。動画の放送・配信、チャットでのコミュニケーション、



第1部講座

「オンラインで、学びと交流の場をつくる方法を知る」

参加者同士でのメッセージのやり取りなどなど、大きなイベント会場で行われているような交流が再現できるオンラインツールです。個々の企画については、コンテンツの規模と目的に応じて、様々なツールを使い分けています。

社会変革を担う各界のリーダーたちが登壇する「ライブセッション」では、EventHub 上でのライブ配信に加え、Q&A や投票機能を持つオンラインツール「Slido（スライドウ）」を活用し、参加者とのインタラクティブなコミュニケーションを実現しました。

参加者同士が対話し学びあう「ダイアログ・双方向型セッション」や参加者同士の交流や繋がりを深める「ギャザリング」では、WEB 会議ツール「ZOOM（ズーム）」で実施し、ブレイクアウトルームや投票機能などを活用して参加者同士のディスカッションや交流を促しました。また、ファンドレイジングの知識やノウハウを



第1部講座

「オンラインで、学びと交流の場をつくる方法を知る」

学ぶ「オンデマンドセッション」では、事前収録した動画を EventHub で配信することで、参加者がいつでも好きなときに学ぶことができる仕組みを実現しました。

また、リアルでは 500 人以上が参加していた懇親会も、今年はバーチャル会議ツール「Remo（レモ）」を用いて開催しました。

オンラインだからこそ深められる学びの例として、同じテーマで、ライブセッション+ダイアログや、ダイアログ+ギャザリング、オンデマンドセッション+ダイアログのように、インプットとアウトプットを組み合わせることで、自然な流れで学びを深める仕組みが作れたことなどをお話しいただきました。

ボランティアとのチームビルディングについては、「ボランティアに何をしてほしいか？何がやりたいか？」ではなく、「どうしてボラン



第1部講座

「オンラインで、学びと交流の場をつくる方法を知る」

ティアとしてこの活動をやりたいのか？」という動機を知ることから始まっています。

ボランティアの思いやモチベーションになるものを知ることの重要性と、そこから生まれるオリジナリティのある企画の面白さをご紹介します。

「オフラインの代わりにイベント」ではなく、「オンラインだからこそ実現できる充実したイベント」の作り方について、ヒントが詰まった時間になりました。



第1部講座

「オンラインで、学びと交流の場をつくる方法を知る」

SPEAKER'S PROFILE



岩元 暁子

日本ファンドレイジング協会
プログラム・ディレクター

横浜市出身。上智大学文学部卒業後、マイクロソフト株式会社（現・日本マイクロソフト株式会社）にて営業として勤務、2010年6月退職。2011年4月より、東日本大震災の被災地・宮城県石巻市にて、支援活動を開始。主に仮設住宅入居者の自立支援・コミュニティづくり支援に従事。2020年5月、石巻市内の仮設住宅解消を機に石巻での活動を縮小し、認定NPO法人日本ファンドレイジング協会に入局。現在は、即戦力のファンドレイザーを育成する「ファンドレイジング・スクール」や全国的な寄付啓発キャンペーン「寄付月間」の運営事務局を担当しながら、個人として、石巻での活動も継続している。



第1部講座

「オンラインで、学びと交流の場をつくる方法を知る」

SPEAKER'S PROFILE



廣瀬 聡

ブックファンドレイザー

1959年広島県生まれ。世界でただ一人のブックファンドレイザー。ネット古書店「バリューブックス」に勤務、本の寄付がNPOや大学への現金寄付になる仕組み「チャリボン」を担当しています。紙の本、町の本屋、図書館の行く末をぼんやり考えながら仕事をしています。



第2部講座

トークイベント【第2部】

「#わたしもたねをまく
—コロナと孤独と
新しいつながり方を考える—」

GUEST SPEAKER

北村 文 (津田塾大学学芸学部准教授)

高橋 ケンジ (恵比寿新聞編集長)

堀 潤

(NPO法人8bitNews代表理事/
株式会社GARDEN代表)



第2部講座

第2部では社会学者の北村文さんを司会に、恵比寿新聞の高橋ケンジさん、ジャーナリストの堀潤さんのお話を伺いました。新型コロナウイルスの影響を大きく受けた私たちは、どのようにして新しい助け合いの形を作ればよいかを参加者のみなさんと一緒に考えました。

登壇者の3名は「アイリス運営委員会」として活動しています。アイリスをもっと良い場所に、ダイバーシティのことを考える機会を増やす目的を持っています。近年のしぶやフォーラムで発信したハッシュタグ「#わたしもたねをまく」というキーワードをもとに、今回の対談の企画が行われました。

対談の始まりは、高橋さんの活動紹介から。「恵比寿新聞」(<https://ebisufan.com/news>)というローカルメディアを運営しています。飲食店の情報やお祭りの情報、学校や保育園のお



第2部講座

しらせ、生活の情報、迷いネコの情報など恵比寿の街の様々な情報を広く取り扱っているメディアです。

次に堀潤さんの活動紹介が行われました。日本各地への取材やキャスターとしての仕事だけでなく NPO の運営などの活動をしています。市民投稿型のニュースサイト「8bitnews」(<https://8bitnews.org/>) では、メディア人ではなく、市民が発信する場が作っています。

話題はコロナ禍での高橋さん、堀さんの反応に移っていきます。

「子どもが学校にいけないという事実を知った時が、新型コロナウイルスの危険性を感じたきっかけとなった」と高橋さんは語ります。在宅ワークの影響か、恵比寿の街からオフィスワーカーが少なくなっていました。すると地域の飲食店は大きな打撃を受けてしまいます。東日本大震災の時の雰囲気にも似た、言葉に出



第2部講座

せない苦しい状況を感じ取った高橋さんは、「あの時に何を学んだのか？」を思い直し、誰かを助けるために自問自答をつづけました。その後、恵比寿新聞のIDを開放し、地域の飲食店のテイクアウト情報などを誰にでも発信できるようにしたのです。この活動を見て、恵比寿以外の街も興味をもち、今では「渋谷区テイクアウトデリバリーMAP」として、様々なエリアの飲食店の情報を集めたホームページが公開されています。(https://oishibuya.com/)

一方で堀さんは、有事に発せられる「みんなで団結し、つながり、乗り越えよう。ステイホーム」という強いメッセージに違和感を覚えると言います。そんなメッセージに「ちょっと頑張り切れない、ついていけないかもしれない」と思う人たちに目を向けていました。「不安はニーズ」をキーワードに、不安や不満を発信する呼びかけをしていました。その不安を受け



第2部講座

取った誰かが、改善するためのサービスやビジネスを生み出したり、カバーする言葉や芸術表現を見つけられるのではという期待をこめてのことです。そのような思いから、困っている人たちの声を聞くためにLINEのID開放も行います。

後半の時間は参加者のみなさんとチャットを使った対話の時間となりました。「困っている」と発することは、実際に困っている人には難しい場合があるという意見がでます。

困りごとの中身だけでなく、困っていることが起きている「場」に注目することも大事であり、困っているということを発信できるコミュニティの存在が必要であることが話されました。その一方で誰かと繋がることを強制しない、「孤独が否定されない」ことの重要性も語られます。



第2部講座

人と出会うことが制限されてしまう、現代のわたしたちにとっての「コミュニティ」の意味を考えるキッカケとなる講座となりました。

この記録集を読んでもらっている方の周辺にも、新しい繋がりが生成しつつあるのかもしれない。

SPEAKER'S PROFILE

北村 文

津田塾大学学芸学部准教授。専門は社会学、ジェンダー研究、日本研究。ハワイ、香港、シンガポールでフィールドワークを行い、国境を超える日本の女性たちのエスノグラフィーを執筆。渋谷区在住。



第2部講座

SPEAKER'S PROFILE



高橋 ケンジ

1975年生まれ。恵比寿を題材としたWEBマガジン「恵比寿新聞」を2009年に立ち上げる。恵比寿の街の情報以外にも、全国にローカルメディアをひろげる「地域密着新聞ネットワーク」の代表やアーバンファーマーを推奨するNPO団体「Urban Farmers Club」の理事を務め他にも渋谷区初の地域子育てコーディネーターとして2016年から渋谷区非常勤職員として従事。2021年3月には「恵比寿の学校」を開校する。



第2部講座

SPEAKER'S PROFILE



堀潤

ジャーナリスト・キャスター

1977年生まれ。元NHKアナウンサー。NPO法人8bit News代表理事／株式会社GARDEN代表。2013年ドキュメンタリー映画「変身 Metamorphosis」制作。TOKYO MX「モーニングCROSS」キャスター。2020年3月映画「わたしは分断を許さない」（監督・撮影・編集・ナレーション）公開。



アンケート結果

フォーラムについての アンケート結果

- ファンドレイジング・日本という活動を知らなかったの、とても熱量の高い集まりなんだと興味を持ちました。また、色々工夫してオンラインでも参加者に高い満足度を持ってもらえたということが分かりました。一方で、Remo や zoom 等というシステムの紹介はあったのですが、もう少し心理的な配慮での工夫について、どのように対応していったのか、という部分が知りたいと思いました。
- 第二部がとても良かったです。恵比寿新聞さんの取り組みや堀潤さんの取り組みは、私の



アンケート

仕事において新たな学びとなりました。

- 第二部のファシリテーターも交えたお三方の対話形式は面白いなと思って伺っていました。自分はSNSやインターネットで情報を集めることはしないので、8bitnewsや恵比寿新聞というメディアを初めて知ることができました。
- 観ている方の反応もチャットを通して伺う事ができ面白かったです。特に“普通”という言葉への反応の様子が興味深かいと思いました。一人一人が日本語という言語の特性をよくよく把握した上で、みなさんがそれらの言葉の意味をどう捉えるのかを改めて伺ってみたいな、なんて余計なことを考えて話を聞いていました。
- 孤独と孤立のちがいに気づけましたし、また



アンケート

考え方や視点の持ち方に包容力みたいなものが役立ちそうだと思いました。

- 地域での共助を考えると、それを(内心で)求めている者がいかにして最初の一步を踏み出せるか、が最大の壁で、その壁を少しでも低くしあるいはほころびさせて、ふとした瞬間にその先へ足を踏み入れることができるような「地域」が複数存在することの大切さを、改めて感じました。一市民である私にとっては、恵比寿新聞や8 bitNewsといった仕掛けは、有名人の作ったスゴイものという感覚でいましたが、規模こそ違えど、今回学んだセンスを応用しながら、自分なりの地域の壁の壊し方を実践してゆけばいいのかなあと思えた時間でした。

ダウン症児とその家族のための連絡会を運営していますが、多くの親たちは（そして恐ら



アンケート

く本人たちも)、生まれたその瞬間から「普通」ではない生き方を約束されることの絶望と、「普通」の呪縛から解き放たれる喜びとを同時に感じながら生きています。

少数派である以上、社会の中で様々な不利益や差別を被る場面があり、どちらかといえば「助けを求める」方に位置することが多いのは事実ですが、本当は、誰に対してもどんな場面でも、対等な存在であることを望んでいます。

この「対等でありたい」という感覚を、団体としても個人としても、臆することなく地域に発信してゆけたらと思います。

- 渋谷の街について考えていることは、他の地域について考えることのきっかけになったり背中を押す物になったりすると思います。来年の開催も楽しみにしております。



アンケート

オンライン開催についての アンケート結果

- 参加者同士のグループトークのようなことも可能性としては面白いように思いました。
- オンラインだったことで日程調整等の参加のハードルは下がったように思います。
- オンライン、いいですね！聴くだけの場合、ちょっとした家事ができる。お腹浮かせた中学生息子が帰宅。ランチ作りながら拝聴できました
- 手元で別の作業をしながら、お話を伺っていました。渋谷に足を運んでの参加だと丸一日他の事はできませんが、オンラインということで気軽に参加することができました。ただ、折角の機会だったので、もっと集中してお



アンケート

話を伺えばよかったかなと反省しております。

- また、オンラインの良さはチャットがあるので、自分の意見や感想をその時々全体の方へ共有することができる点です。たとえば、拾い上げられなかったとしても、他の参加者さんがそれを見て、気づきがあったり、考えたりするきっかけになると思います。その点に関してはリアルでのイベントよりも優れていると思います。
- リアルとオンライン併用はやはり面白いと思います。リアルイベントにオンラインでも参加できるのは勿論ですが、オンラインでの参加者と現地での参加者もオンライン上で交流できるようなブースがあるとちょっと面白いのかな、と思います。
- オンラインでのチャットだと限られた文字数



アンケート

で伝えなければならないので、大変注意が必要だなと感じています。顔も見えない多様なバックグラウンドをお持ちの方々が参加されているので、自分ももっと言語について学んで、相手へ意図せぬ誤解を招かないように、もし誤解を招いてしまっても、しっかりと自分が指し示している意味を説明できるようにしようと、強く感じました。

- 盛りだくさんの内容だったので、もう一度、アイリスの YouTube チャンネルで復習したいと思います。今後もオンラインで開催してほしいです
- チャットなどを通してインタラクティブなコミュニケーションが実現できていたところが印象的だった。
- チャットのコメント欄にもよく目を通してい



アンケート

ただいていたようで、これによって参加者の
一体感が得られたように思えます。